
モノノケごはん

雨蝶蜜裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノノケごはん

【Nコード】

N9127Y

【作者名】

雨蝶蜜術

【あらすじ】

元神社の跡取り娘と、元神様。

二人は、彷徨う魂の話を聞き、その報酬としてごはんを作ってもらう。

毎日違うごはんは、その魂たちの思い出でもあり、人生そのもの。さあ、今日もおいしいごはんを片手に、話を聞きましょう？

クリームシチューと手紙

何時だって、人は誰かに聞いてもらいたいと思っている。
そこに、多少の差異はあれど、求めることは変わらない。
それならば、聞きましょう。

おいしい、晩ごはんを片手に・・・

一杯目『クリームシチューと手紙』

寒い、寒い。

手もかじかんで、感覚が無くなっている。

足は棒のようだし、歯の根も合わない。

このままでは、倒れてしまうかもしれない。

そんな事を思いながら、ただひたすら、真っ暗闇を進む。

ここまで来れば、あともう少しのような気もするが、さてどうだったか。

覚束ない足を慎重に踏み出し、かさと音を立てる物を握り締める。
既に、それが何だったかすら覚えてはいないが、きっと大事な物だったから。

大切に、大切に。

ぎゅっと震える手で、握り直した。

そうして、しばらく歩いて行くと、うつすらと淡い光が射しているのが見えた。

寒さも和らいできたようで、足もほんの僅かだが軽い。

そのまま、その光へ向かい走りこんだ。

それと同時に、疲弊していた体は力を失い、意識すら無くなってしまったのだが、その時に聞こえた声だけは、忘れられそうに無かった。

「おい、今日の飯はまだか？」

「そう急かさないで下さいよ。もう少しで、見えると思うんですよ。」

高圧に言い放つ女性と、およそ人に見える事の無い私。

チンチンと箸で食器を片っ端から叩いている音に、そろそろうんざりしてくる。

「それは行儀が悪いと言ったではありませんか！浮舟！^{つきふね}」

「・・・飯が遅いのが悪い。よって、飯がやって来るまで私は叩く。お前に煩いと言われても、私は叩き続けてやる。止めさせたかったら、早く飯を呼ぶんだな、^{ひはな}緋華。」

ニヤリという擬音語付きの笑顔でこちらを向いた女性、もとい『^か量音浮舟』は私の主だったりする。

元は、そこそこの名のある神社の跡取り娘だったのだが、両親である宮司と巫女が同時に他界し、まだ幼かった浮舟は神社を引き継ぐ事無く、あっさりと親戚にその席を譲ったのだった。

そして、そんな浮舟にすっかり、本当にすっかり話しかけてしまったのは何を隠そう、その神社の祀神であつた、私こと^{ひはな}緋華だった。

とまあ、過去の私と浮舟の話しは本棚の隅くらいに置いていて、今迅速に私が行わなければならないのは、そう、浮舟の晩御飯を確保する事だ。

その方法というのが実に変わっている。

勿論、浮舟が作るのではなく（そんな事をさせれば台所はその息の根を止めてしまう）ならば誰が作るのか。私は曲がりなりにも神籍を持つ者として、そのような事はしない。

そう、作るのには『神に呼ばれし者』通称『^{おもいたま}想霊』と呼ばれる存在。

彼らは、元々人間であつたり動物であつたり、それこそ人間以外の存在であつたりするのだが、何らかの理由でその命を落とし、その際に強く『想い』を抱えたまま死んでいる。

故に、その存在は自然へと帰る事無く存在し、神のみが彼らを呼び出す事が出来る。

では、何故その『想霊』を呼ぶのか。

それには、浮舟の特殊な力が関係している。

浮舟は特殊な家系の持ち主で、『想霊』に仮初の実体を与える事が出来た。

そして、それに必要なのは『想霊』と『主人』となる浮舟との契約。大抵の『想霊』は自身が抱える『想い』の捌け口を求めている。それは、文章であつたり、絵であつたり、形は様々だが、浮舟は文章として作品に残す。

それは即ち、浮舟の職業ともいえた。

チンチンチン

そろそろ本当に耳障りな音に嫌気がさし始めていた頃、それはやって来た。

ドスン

「来たか！？私の晩御飯！」

「浮舟、第一声がそれとは、いくらなんでも可哀想ですよ・・・あら、気絶しているようですね。随分と彷徨っていらつしやったんでしょう。」

「ふざけるな！起こせ、叩き起こして飯を作らせろ！さもないと・・・緋華のコレクションを片っ端叩き壊してやる。」

「貴方って人は・・・！本当に性質が悪いですね。しょうがない、すみません。起きて下さいませんか？」

ぺちぺちと頬を何回か叩きながら、その体を揺する。
名も分らないので、そこは呼ばず、紺の制服を着た少年を覗き込む。

歳の頃は十五、六といった所か。

眠る顔はあどけなさが残る。どこかの粗暴な誰かさんとは違って。
数度、それを繰り返したところで、少年の口から僅かに言葉が漏れ始めた。

「・・・て・がみ。」

その声に、浮船と私は目を見合わせる。

「これの事か？」

早速、何の了承も取らずに、少年の手にしっかりと握られていた封筒を抜き出した浮船は、私が止めるのも聞かず、ビリビリとその封を開けてしまった。

「浮船、貴方勝手に何をしてるんですか！」

「何って、手紙って言うから開けてみたんだけど。それに、契約をするなら知っておいた方が有利だろうが。」

「それはそうですが・・・私は、一体どこで教育を間違えてしまったのでしょうか・・・」

「安心しろ。お前に教育してもらった記憶は無い。」

「うき「これ、何だ？」

怒る私に、平然とした浮船が手渡してきた物は、

「白紙、ですね・・・」

「白紙、だよな・・・」

てつきり、二人とも何かが書かれていると思っていただけに、それは予想外と云わざるをえなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9127y/>

モノノケごはん

2011年11月27日11時56分発行